ハムレットの舞台につうが飛び出した

２００１年１月２５日
西九州教会 佐々木正明

昨日、同じ教区で働く坂本先生から、ふたつの文書が送られて来ました。ひとつは教団理事長に宛てた、先生ご本人と教会の「教団離脱通告書」のコピーであり、教団が日本福音同盟に加入してから、 そ路線に乗って動いていることにはついて行けません」 と 記れていました。 ま、「題は我々の歴史観です」とも書かれていました。もうひとつは「教団の方針と私の考え方」という文書で、教団の社会問題委員会の「国旗、国歌に関する声明」に対する、先生の反対論で、今回の先生の決断を説明する内容でした。

私は、この問題について坂本先生と詳しく話し合ったわけではなく、今回の先生の文書を読んだだけで、先生と同じ考えを持っているかどうかは
判断できませんが、こう言う問題に対する、ここしばらくの教団の「姿勢」については、危惧を感じていた者のひとりです。ひとりの先輩伝道者が、教団離脱という重大な決意をせずにはおれなかった問題に対し、私も沈黙を守るべきではないと感じ、小文をまとめたいと思います。同労者諸師がこの問題について考えるきっかけになれば幸いです。また、これをお読みになって、坂本先生が教団離脱を思い止まってくださるならば、さらに光栄に存じます。

日本福音同盟（JEA）の社会的活動、政治的発言を見聞きしていますと、確かに左よりの感じを否めません。最近教団諸文書と共に送られて来た、「今どこに立っているか」というタイトルの「第１回JEA『新教の自由』セミナー報告書」を読みましても、極めて明確に左よりの姿勢が出ています。また、教団の社会問題委員会によるいくつかの文書を読んでいても、JEAの考え方に追従しているかのように思えます。あるいは、JEAが、わが社会問題委員会に追従しているのでしょうか。

１. 社会問題委員会の文書について
この委員会に属する先生方のまじめな学びの態度には、発表された文章を読むごとに感心させられます。しかし、これに関してまずはっきりさせ
ておくべきことは、これは教団の公式見解ではないということです。次に、それが教団の機関紙などに、教団の公式見解のように記載されてきたのは、大きな誤りであったと言うことです。坂本先生が「暗然」とされたのは、社会問題委員会の意見の内容自体もさることながら、そのようなひとつの見解に過ぎないものが、あたかも自分が所属する教団の公式見解のように、機関紙などに載せられている事実によるものではないかと、想像するものです。

教団の諸機関、たとえば国内伝道部、海外伝道部あるいは日曜学校部などの各部が、教団の基本的信仰に立ち姿勢に倣って、それぞれの計画を練り、啓発活動をするのは当然のことですが、たとえば、今回の国旗・国歌問題のような、まだ教団としての基本的姿勢、あるいは公式見解が定められていない、政治的、社会的、思想的事柄に関し、なんの手続きもなしに、ひとつの部署が全体の意見を代弁するかのような形で見解を出すことは、手続き論としても、控えられるべきだと思います。にも拘わらず、それがあたかも教団の公式な見解でもあるかのような形で、一般信徒にも配布されて

いる機関紙に載せられてきたという事実は、はなはだ遺憾だと思います。

２． 教団の政治的・社会的・思想的立場について私たちの教団は、政治団体でも社会団体でも、思想団体でもありません。私たちをひとつにしているのは、イエス・キリストに対する信仰です。私たちの団体は信仰団体です。キリストのみ体、教会です。この団体では、たとえそれが結びつける要因であろうと、切り裂く要因であろうと、イエス・キリストへの信仰以外の要因を作ってはならないのです。政治的立場、社会的思想、人種、あるいは文化、職業、趣味、道楽にいたるまで、どのような要因も、キリストのみ体である教会を結びつけたり、切り裂いたりするものであってはならないのです。

もし、教団がひとつの政治的、思想的立場を取り、ひとつの見解をまとめると、それはキリストに対する信仰以外の要因となってしまうのです。キリストに対する信仰は、各自の実際生活への適応の段階によって、千差万別の形をとります。それだけ理解と解釈、対応のしかたがあるのです。それをひとつにまとめることは、聖書の求めるところではありません。教団の中には、あらゆる社会階層の人がいて良いし、いるべきです。思想的には左側の人も、右側の人もいて良いはずです。それぞれが、キリストに対する信仰と良心で生きるべきことであり、私たちにとって大切なのは、キリストに従うという基本的姿勢を保ち続けることです。

ですから、教会は国旗・国歌にかんする声明のような、政治的思想的声明を出すべきではありません。それはキリストへの信仰以外の要因を作ることだからです。これはまた、教団が加入しているJEAの考え方とも関わってきます。JEAが、このような事柄に積極的発言を繰り返して行く現状に対し、私たちは警戒し、警鐘を鳴らすべきだと考えます。私たち教団が、あるいは個々の牧師が、わたしはそのような声明を出すことに、また総理大臣に文書を送るというようなことに、賛同しないと言う、明確な意思表示をする必要があるかもしれません。

３． 教会の使命
はたして、このような政治的・思想的発言をし、社会活動をすることは、教会にとって必用なのでしょうか。教会の使命は何かと言う問題です。浅薄ながら、この点について少し論じて見たいとおもいます。

A. 啓蒙思想・合理主義・理神論・宗教的相対性
近代社会に大きな影響を与えた思想に啓蒙思想・合理主義があります。人間の思考能力を高く評価し、合理性が何よりも大切と考え、
社会の発展、特に自然科学の分野では、非常に貢献してきました。しかし、一方ではそのような考え方が聖書解釈や、信仰の世界にまで入
り込み、聖書に記されている記事で合理性に合わないと考えられた部分、たとえば天地創造や奇跡などは否定され、現実の信仰生活の中で
の祈りの大切さも限りなく希薄にされてきました。そういう風潮に断然逆らって興った、福音派と言われる、聖書を誤りのない神の言葉と
信じる教会も、その多くは極めて理神論的になり、神が現在私たちの祈りを聞き、奇跡を行い病を癒してくださるなどと言うことが、信じ
られなくなっていました。奇跡と癒しはいにしえの聖書の世界に閉じ込められてしまったのです。

啓蒙思想･合理主義・あるいは理神論的考え方の洗礼を受けてしまった教会の多くは、クリスチャン信仰の絶対性も捨ててしまう傾向
にありました。世界中のすべての宗教は、それぞれの文化の中では良いものであり、価値がある。また、ある意味で、聖書の福音以外の、あるいは聖書の福音に先行する福音であると考えて、宗教的相対性の世界に入って行きました。このような考え方の教会の大きな集まりが、 WCCと言われるものです。WCCは、当然の成り行きとして、宣教の中止を訴えました。教会に必用なのは宣教することではなく、それぞれの土地、それぞれの文化の中にある福音を見出すことであるということです。それで宣教師の無用論が唱えられ、教会は宣教の代

わりに、病院や学校を建て、社会に貢献するという、いわゆる社会活動の道を選んで行きました。それはほどなく、どのように社会の奉仕活動を続けても、貧乏を生み出し、差別を生み出している社会組織、経済機構、政治形態そのものが変わらなければ、本質的解決にはならないという理解を生み出し、教会はそのような貧困、差別など数々の非人間性を生み出している社会悪と、戦わなければならないという、
考え方を築き上げました。

WCCに所属する教会あるいは同調する教会の多くは、このように社会悪と戦って行く過程で伝道をおろそかにし、当然の結果とし
て、どんどん教会員を失い弱小化して行きました。その反面、これらの教会の社会的発言は鋭さを加え、社会悪との戦いのためには武装闘
争さえ容認する者が出るほどになって行きます。中南米の反政府ゲリラが武器を購入するため、資金を送った日本の教会もあったという話
です。

Ｂ．福音派の動き
一方、福音派を標榜する多くの教会、特に、しばしば「根本主義者」とからかわれる教会は、ある意味で、社会派と言われる先に述べ
た教会への危機感から、あるいは対抗意識または嫌悪感から生まれたものであり、当初はもっぱら伝道･宣教に力を入れて行きました。し
かし、世界宣教を進めていく長年の過程で、次第に、社会活動の大切さにも再び目を向けるようになり、敵視していた社会派の教会とも交
わりを深め、その考え方を理解しようと言う動きさえ出て来ました。

このような中で、福音派の教会の世界的な集まりが開かれました。１９７４年のローザンヌ会議です。この会議はその後も場所を変え
て各地で開かれ、世界中の福音派の教会に重大な影響を及ぼし続けていますが、この会議で重要な役割を果たしたのが、聖書学者、宣教学者として名高いジョン・ストットという方です。この会議自体、あるいはこの会議の宣言文、そしてその後のこの会議の影響力の中に、彼の及ぼした力が浸透しています。

ストットは、当時中南米で非常に活発に活動していた、カトリック教会内社会派の、開放の福音」に く影響を受けた、「急進派」 の導者たちと交流し、その考えを反映して行ったのです。ですから、あのローザンヌ宣言の「開放の福音の臭さ」を嫌って、署名しなかった代表者も多かったという事実があるのです。

日本の福音派諸教会は、もともとストットとの交流があったらしく、たちまちの内にこのローザンヌ宣言を「聖書のごとく」受け入れ
てきました。有名な聖書学者、宣教学者たちが、無批判にこの宣言を引用し、宣伝し、それを実行しようとているのには、驚きを禁じ得ま
せん。付和雷同が日本の文化と思えば、納得できます。また、世界の福音派という見地からすると、これは、社会派といわれる教会への対
抗意識、あるいは嫌悪感のために、社会活動からまったく身を引いてしまったことに対する、罪悪感の反動、いわゆる、時計の振り子運動
ではないかと考えられます

４．ストットの宣教論とその問題点
ストットは、教会の使命（mission）、すなわち、教会がこの世界に派遣されている目的は、伝道と社会活動であると言います。伝道と社会活動はあたかも車軸の両側にひとつずつある車輪のようなものであり、ひとつが欠けても用をなさないと説明し、教会が真に教会であるためには、伝道と社会活動の両方を行っていなければならないと主張しています。
ですから、伝道一本槍で突き進んできた福音派、あるいは根本主義の教会は、教会としての真実の姿を持っていなかった、欠陥教会であったということになります。

ストットの伝道の定義も、大変不可思議な定義なのですが、ここでは扱いません。ただ彼の社会活動という概念には、博愛主義的な救援活動だけに留まらず、武力闘争こそ含まれていませんが、あらゆる社会悪を厳しく糾弾して行く、戦いの社会活動も含まれています。（最近は、社会活動を博愛主義的な救援活動と、社会悪との戦いにはっきり分けて考える傾向が、強くなっているようです。）

聖書を知っている者は、誰でも心得ていることですが、教会が社会活動をするように、あるいはしなければならないと明白に教えられている所、命令されている場所はどこにもありません。伝道するように、宣教するようにという教え、命令は、明々白々幾度も繰り返されています。また、教会が社会活動を目的として乗り出している例も、聖書の中にはありません。聖書の中に直接の教えも命令も例もない事柄を、教会の使命と言うような大切なものに祭り上げて良いのでしょうか。聖霊のバプテスマというものを教会の神学とすることに対し、聖書に明白な教えも命令もない。例も少ないと言って反対する神学者が大勢いるこの時世に、なんとしたことでしょうか。

このように言うと、たちまちいくつかの反論が出てきます。まず、キリストも社会活動をしたではないか。病人を癒し、貧しい者に金品を与え、社会悪をも鋭く糾弾されたではないかという意見です。

キリストがこの世においでになった目的、すなわち使命は、あくまでも世をあがなうため、すなわち贖罪愛の実践のためでした。この目的のためにキリストはこの世に生まれ、生き、活動し、死なれたのです。この世から貧しさを無くし、差別を撤廃するためではありません。教会はこのキリストの大使として、キリストによってこの世に遣わされています。キリストの業務、すなわち贖罪愛の実践を継続するためです。教会は、キリストが父から遣わされたように遣わされています。同じ目的のため、同じ姿あるいはあり方で、遣わされているのです。私たちはキリストが目的としなかった働きのためには遣わされていないのです。

では、キリストの癒しや貧しい者への援助は、どのように考えるべきでしょうか。確かにこれは社会活動といえる側面を持っていました。神の国の贖罪的到来という意味のほうが大きいとは思いますが、社会活動であったことは事実です。しかし問題は、これが、キリストがこの世においでになった目的であったかということです。

キリストがおいでになった目的は、あくまでも贖罪愛の実践です。しかし、その贖罪愛の実践のために各地を回るとき、悲惨な人間の姿に遭遇します。愛という性質が悲惨な姿に遭遇すると、哀れみという反応が起こります。その哀れみは助けると言う行動を生み出します。つまり、キリストの社会活動は、キリストがこの世界においでになった目的、ミッションではなく、天地創造以前から愛であられたキリストの、一般愛の発露だったと言えるのです。それはまた、完全な人となってくださったキリストの、人として生きる姿、生き方だったと言えます。しかし、キリストは生きるためにおいでになったのではなく、死ぬために、すなわち贖罪愛の実践のためにおいでになったのです。

ですから、キリストが遣わされたように遣わされた教会も、当然、一般愛を実践しながら生きて行きます。しかしそれはキリストの使命ではなかったように、教会の使命ではありません。キリストの生きる姿であったように、教会の生きる姿です。生き方、様態です。したがって、社会活動は、教会の使命、存在の目的とされてはならないものです。教会がそのために生きてはならないものであり、それを第一として力を注いではならないものです。しかしその一方で、教会はそれを決して失ってはならないものです。

さらに取り上げられるのが、「隣人愛」の戒めです。隣人を愛することは、神を愛することに次いで大切な戒めではないかという議論です。この隣

人愛は普遍的なものであるがために大切です。しかし、これはあくまでも一般愛に属し、全人類が生きるべき姿であり、教会がこの世に派遣された「目的」ではありません。

ここで間違ってほしくないのは、いま語っている一般愛というものが、あくまでも教会外の人々に対して示されるもので、教会内部の互いに愛し合う「兄弟愛」とは別のものだと言うことです。兄弟愛とはキリストが私たちを愛してくださったように、キリストにある兄弟姉妹が互いに愛し合う愛のことで、神の贖罪愛によって生じ、啓発され、強化されものです。この兄弟愛は、人種、分化、国境を超えて、教会の内部で実践されるべきものです。わたしたちが、愛。 はめて知った。 イスに出会ってから。と」歌う種類の愛です。 弟兄愛の実践は、 ウパロが「 み恵の業」 呼とび、 を命賭けた通りです。彼は飢饉に苦しむエルサレム教会を助けるために、マケドニヤやアカヤを始めとする異邦人教会から義援金を集め、逮捕、監禁、死さえも覚悟して、自らエルサレムに送り届けています。しかし、パウロも教会も、当時の教会外の社会にごく当たり前のように存在していた、飢えにも、裸にも、病にも、何の対応もしていません。少なくても、聖書には記されていないのです。ですから、慈善活動としての社会活動を、教会の使命の一部として取り入れることには、聖書的に、神学的に無理なのです。

５. 正義の戦い
次の問題は、社会悪への戦い、正義の戦いです。これが今回、問題とされていることです。つまり、ＪＥＡおよび私たちの教団の社会問題委員会
は、教会が神の正義の代弁者、あるいは代理者として、当然、社会悪へ戦いを挑むべきであると考えておられるように受け取れるからです。（数年前に発行されたＪＥＡの「救済の神学」に対しては、小生はすでに反論を試み、諸師に配布しているとおりです。）

私たち教会は、確かにキリストの代理者であり、キリストの権威を持って語り、キリストの権威を持って行動するのですが、そのキリストはあく
までも、第一降臨のキリスト、馬舟の中に生まれた謙卑のキリスト、苦しみを通して贖いの働きを完成されたキリストであって、生ける者と死ねる者とを裁くためにおいでになる、栄光のキリスト、第二降臨のキリストではないのです。私たちには福音が任せられ、悪霊どもを打ち破る力を与えられ、天国の鍵さえ授けられているのですが、この世の善悪のすべてを見極める目も、正しく判断する能力も、断罪する権威も与えられてはいないのです。

歴史を見ると、自分たちは、裁き主である第二降臨のキリストの代理者であると、誤って思いこんでしまったとき、教会は残虐な犯罪者になりさ
がったことが多いのです。私たちは、歴史からも学ばなければなりません。パウロによれば、私たちはやがて、御使いたちさえも裁くようになります。しかしいまは、彼がはっきり言っているとおり、教会外のものごとを裁くのは、私たちのするべきことではないのです。

そういうわけで、私たち教会が、ましてやその中の一部のものが、教会全体を代弁して現在社会の何が悪で何が善だと、断言することはできない
のです。そのように出来ると考えるのは、教会の思い上がりであり、そうするのは重大な誤りです。事実、私たちの間には、社会問題委員会の考え方に賛同する方々もおられることでしょうし、また、なんとしても納得できない方々もいらっしゃるはずで、意見の統一などは出来ないはずです。無理にそのような試みをすると、必ず疎外される人たちが出てきます。このようなことで、み体の一部を疎外してはならないはずです。今回の社会問題委員会の文章によって、坂本先生は、疎外されそうな多くの信徒たちの代表となって、敢えて自ら進んで疎外されることをお選びになったのではないでしょうか。

キリストの弟子たちの中には、右翼とも言うべき熱心党に属する者も、傀儡政権を支持する祭司階級の者も、圧制者であるローマに恭順して税金取りになる者も、ローマの軍隊に所属する者もいました。政治的、思想的にはまったく相容れない者たちが、キリストにあってひとつとなっていたのです。このような状況は、初代教会にあってはさらに複雑になったことでしょう。教会はそういう中に生きながら、政治的、思想的統一を図らず、多

様性の一致を求めて行ったのです。

この種の論議では、預言書等で言われる神の正義の執行ということが、しばしば取り上げられます。確かに、旧約の預言者たちは、神の権威を持
ってイスラエルに正義を求め、為政者たちを糾弾して行きました。しかし理解しておかなければならないのは、旧約時代の「神の正義」の執行の勧めは、あくまでも、当時のイスラエルの「神権代行政治」の中においてであったということです。それがそのまま、新約の時代の人類世界に適応されてはならないのです。新約時代の預言者であると言われる教会は、「神権代行政治」の中には生きていません。あくまでも、パウロが生きていたような、異教徒の政治の中に生きているのです。パウロが異教徒の為政者に対して行ったのは、正義の要求でも、抗議でも、糾弾でもなく、彼らのために祈ることでした。

パウロはまた、差別の世界に生きていました。それは、現代世界とは比較にならないほどのものであったに違いありません。パウロの信念は、キ
リストにあっては一切の差別はないということでした。ところが現実には、彼は女性差別をある程度受け入れ、奴隷制度さえも容認しています。そのような社会のあり方に、むしろ旗を挙げて抗議運動をするようなことはせず、習慣、制度として受け入れ、その習慣、制度にしたがって生きることを教えながら、それらを真っ向から否定する基本的精神を高揚し、教え、励まし、教会がそれらに打ち勝つ基礎を固めたのです。ヤコブもまた、自分たちを取り囲む社会悪に対して、戦うことではなく耐え忍ぶことを教えています。それは、キリストの精神の表現です。

６．宣教論的見地から考える
教会や教団が、キリストによっても聖書によっても求められていない、政治的思想的統一見解を出すこと、声明文や抗議文書を公にすることは、はたして、教会の使命である宣教、伝道という見地から益のあることでしょうか。

そのような行為は、必然的に、福音以外の要素で命に至る門を狭めることになります。門の広さを決定するのは福音だけです。福音以外の人為的
な事柄で、命に至る門を広げたり狭めたりするようなことは、絶対にしてはならないのです。ましてや、現在のＪＥＡや社会問題委員会の見解は、あたかも旧社会党が言い出しそうな見解です。現在の日本の大多数の人々が、すでに見切りをつけてしまったような意見です。このようなことを言うのがキリスト教であると思われると、国民の大部分がキリスト教に見切りをつけてしまいます。その意見が正しいか正しくないかの議論ではなく、日本人の社会党離れの波に、キリスト教が飲み込まれてしまう危険性を指摘しているのです。

日本の左翼運動が、キリスト教運動の一端として産声をあげたと言う事実も大切かもしれませんが、左翼だけがキリスト教ではないという事実は、もっと大切です。私たちはキリストが命令されたこと、聖書が要求していることならば、たとえ大衆が何を言い、為政者がどう考えようが、断固としてそれを実行します。しかし、この問題は、キリストも聖書も、むしろ関わりを避けた問題なのです。キリストは、「カイザルのものはカイザルに」とおっしゃったのです。あのお言葉は、お金の問題について語られたものではありません。「神権代行政治」の卵の殻を尻にくっ付けたままの、時代遅れの感覚で生きていたユダヤ人たちが、キリストの主権とローマの主権とを並列させ、上下を競わせようとしたことに対し、キリストは、御自分の主権がローマの主権と関わりのない、次元の異なるものであることを宣言なさったのです。第一降臨のキリストは、この世の政治に関わることを拒否なさったのです。

結び
私は、社会問題委員会の文章が載っている「アッセンブリー誌」は、牧会的配慮から、 信徒に手渡さないとおっしゃる同労者たちを知っています。伝道と言う教会の使命、キリストの至上命令を遂行するためには、妨げとなるからです。坂本先生が暗然たる思いにさせられたのも、まさにこの

点においてではないでしょうか。

くり返しますが、私は、坂本先生には是非教団に留まっていただきたいと願うものです。先生が、社会問題委員会と意見が異なっているからと言って、教団を出る必要はまったくありません。一部の方たちのあのような意見が、（あるいは大部分の方たちの意見であっても）教団の公式見解と思われるような形で発表されたことに対しては、私も、もう一度はっきりと異議を唱えるものです。

もちろん、政治的思想的問題について議論すること自体、悪ではなく、むしろ必要であるとしても、教会として、また教団として、特定の立場を表明することは、誤っているのです。キリストの正義を自分の手に取ってはならないからです。犯罪の被害者が公正な裁判を待たず、「正義」を自分の手にしてはならないのと同じです。社会悪に戦いを挑むのは、教会の役割ではありません。役割でないところに顔を出すのは、ハムレットの舞台に、突然、夕鶴のつうが飛び出すようなものです。飛び出したつうが真剣であればあるほど、喜劇となり、悲劇となります。